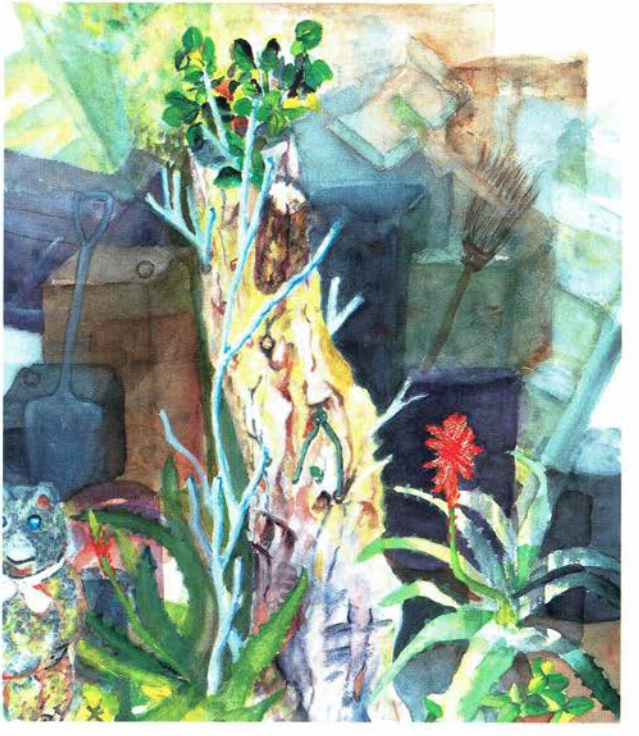
村野次郎創刊

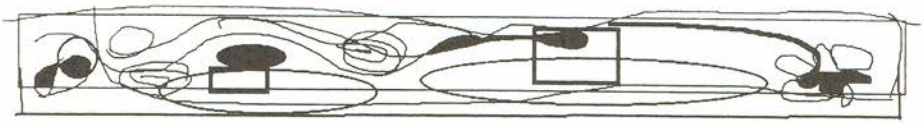
香蘭



2021年(令和3年)3月号

第 98 巻　　第 3 号　　通巻 1083 号

二〇二一年(令和三年)三月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第九十八巻第三号



香　　蘭

2021年（令和３年）３月号
第98巻　第３号　通巻1083号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（67）……青山侑市…表二
作品
一……2
二……23
三……31
推薦香蘭集……38
香蘭集……39
作品一特選（一月号）…市川・大井田・岡野・柏原（恵）・川原・近藤（光）・城・鈴木（桂）・坪・中村（か）・森田……16
作品二・三特選（一月号）…青山（侑）・阿部・江口・庄司・中井・平川・藤本・牧田・竹田・中村（陽）・藤田・渡邉（典）……18
村野次郎への旅（132）……千々和久幸……20
歌の生まれる場所（98）……桜井京子……22
七首抄（一月号）……市川・後藤・柏原（貞）・川久保……43
エッセイ・自由研究　安楽死……庄司健造……44
私の読む現代短歌（6）「スーパーレディ」齋藤史……田中あさひ……46
焦点（一月号）採らなかった、採れなかった歌（二）…千々和久幸……48
作品評（一月号）　作品一……坪裕……50
作品二……山下紘正……52
作品三……小原裕光……54
香蘭集……河野慎二……56
文法あれこれ（22）……田中あさひ……58
緑地帯……城・手島・藤田・柏原（貞）……60
歌集管見　島田修三歌集『露台亭夜曲』……丸山三枝子……63
西川須美子歌集『花はふりくる』……長野道子……64
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……65
令和三年度　誌上全国大会開催のご案内……74
歌会及び会合・会員消息・他……79
編集後記・新宿日記……82
表紙絵……中村陽子「おしゃべりな木」　目次・緑地帯カット……和田和雄……表三

村野次郎作品　私の愛誦歌（67）

いつしかに春来(はるきた)るよと庭(には)の面(も)に
流(なが)らふ光(ひかり)ふみてあゆめり

『現代短歌集』『樗風集』

青山侑市

昭和四年、改造社から『現代短歌集』が出版された。これには、明治大正昭和三代の歌人一五二名の作品が載せられている。

先生の作品は二十首が掲載されており、括弧書の（春来る六首）、（秋より冬へ六首）（をりをりの歌四首）（山の湯四首）である。

ここに掲げたのは、（春来る六首）の冒頭の歌で、一、二句は、何時とはなしに春は来たなあ、との詠嘆で呼び掛けでもある。ここに言う春は抽象的なもので、花や庭木などの移ろいを観ての具体的な感慨ではない。

下句の「流らふ光」は、流れるように続く光で、実際は、庭一面に光が照り入る、光が当たっている、そんな状態であろう。それを光が水の流れる様にと捉えて、踏み歩む先生である。

字句の詮索はともかく、平易平明な詠みに、春への高揚感と詩情を感じさせる歌である。

（歌集では短歌新聞社文庫『樗風集』105頁に掲載。『村野次郎三百首』には収録されていない）

四選者の作品

たぶんうれしい

平塚　千々和　久幸

木枯らしの過ぎたる後を急ぎ行く格別の用持つにあらねど
とりどりのマスクが隠すとりどりの顔思いおりガラスの内に
そんなにも嬉しいですかと聞かれおりたぶんうれしいだから言えない
余生とう言葉をこの日三(み)たび聞くよーせやいとわが返しやらんに
うなだれてカンナの花が咲き残る明日に希望のなしとは言えず
ぎりぎりまで連絡くれぬこの人をタフともずぼらとも思い待ちいる
読み書きに倦みたる夕べテレビより春一番を告ぐる声聞く
湯上がりの妻がベッドに眠そうにいるをスマホの画像に認む

固き莟

鎌倉　香山静子

Vの波紋ながく曳きつつ泳ぎゆく一羽の鴨に冬の陽は差す
冬の水冷たくないか悠然と泳げる鴨にとどけ午後の陽
コロナ禍にマスクを付けて見る池に鴨は泳げり関わりなしと
感染のまだおさまらぬ年末を去年と変はらず窓を拭きゆく
拭き終へし窓より見ゆる庭隈に椿は固き莟を持てる
感染に怯えつつ過ごす年末をせめては成しし短歌(うた)によろこぶ
この年もどうやら事無く過ごせたり世はコロナのはびこれるとも
来ん年の良かれと祈り見上げたる空はまばゆく茜を流す

燦々の生

我孫子　丸山三枝子

この歌稿手にせし四日後に訃報とどきたりああ門倉先生
絶筆の歌ぞ祝ぐべし「好きな歌とことんつき合い悔いなし一生(ひとよ)」
兵たりし歌人(うたびと)にして「古兵よりぶん殴られし」門倉弘泰
百歳の生日超えて逝き給う〈生粋の津久井人(びと)〉燦々の生
醤油さしに醤油を充たし立冬の夜のキッチンの灯りを落とす
生死には関わりないが一文字の誤植は今日の一大事なる
手を振りて聖橋ゆくハンチング　とおき記憶か本に読みしか
極月の街上暮れつつ海底をただようごとく人は歩める

無限のわたし

東京　桜井京子

永遠にかはらぬ信号待つてゐる歩行者用ボタン押すを忘れて
金網のむかうに広がるヌスビトハギかなはぬ恋の話などして
佳いことはもう何にもないといふやうなそんな感じだ冬の青空
リーダーは誰でもなくて夕ぞらに膨らんでゆく椋鳥のむれ
伸びきつた輪ゴムはいつか切れるだけ切れてもあした日はまた昇る
駅中の合はせ鏡を見てとほるさびしくないか無限のわたし
締切りだ、十日までだといふ声すこんなにしょつぱいカップヌードル
コロナ禍のこんな最中にようこそとふにやりとしたる児を抱きあげる

作品一特選

（一月号作品から）

香山静子選

めぐみさん　東京　市川義和

夜更け二時電話の鳴りて取りたれば非通知の文字見え無言で切れぬ
もしや亡き母が電話の主ならんか　しばらく夢でもご無沙汰つづき
寝つけぬまま十四年前の母の死の前後のことを思ひ出しをり
コロナ禍で関西行きもままならずお墓参りは止むなくお預け
めぐみさん誕生日迎へ五十四歳　十三歳の拉致から四十一年
北朝鮮、父滋さんの逝去の報伏せしままなるか　めぐみさん嗚呼

・対象への迫り方に温かな人間性が見える。

テレビの正義　川崎　大井田啓子

遠くより近づく君に手を振りてカフェのテラスに立ち上がりたり
地下鉄を降りのぼりくる君を待つ午後の広場のうす日の中に
春原さんの角を曲がりて初夏の風に吹かれて駅へと向かふ
そこここに百日紅咲く炎昼を冬眠したるやうに家家
この辻を曲がれば直射日光が照りつけるはづ　ままよ曲がらむ

・過剰な思い入れを除いた描写の中に温もりが感じられる。

柘榴　尾道　岡野甫江

口元を隠してしまふ布マスクもの言ふまなこ自づと笑みて
酔芙蓉よひて色づく庭の角　今宵火星が月に近づく
透明なアクリル板も手袋も違和感うすれレジ前に立つ
紅玉の歯をみせ垂れる柘榴の実天の細枝切れむばかりに
「GoTo」の誘ひの声も捨てがたく机に一つ柘榴を置きぬ

・生き難い現代を過ごす庶民の姿が垣間見える。

三世代　尾道　柏原恵

大地みな我がものとして大げさに両手をひろげ深呼吸する
吊し柿シャツも干しいる低き軒愛の満ちたる家かも知れぬ
窓の外の干し物揺るる影のなか老いのコラムは興味をそそる
それぞれにニュアンス異なる三世代食い違いあれどコロナ恐れる
「あるある」と声あげ芋を抜く孫と年甲斐もなく燥ぐ夫なり

・大家族の中に住む女性の暮らし方を詠んでいる。

新しき職場　川越　川原優子

窓広く人は多くて賑やかよ人事異動にて来たる職場は
新しき職場に過ごす一ヵ月皆の人柄観察しつつ
おしゃべりの輪からは少し距離をもち仕事ぶり見て過ごす十月
老犬が脳梗塞に突如なる飼い主の持つ病と同じ
金を持ち達者な口持つトランプを世界の歴史は何と刻まん
「鬼滅の刃」流行と聞けば観に行かん分かるかどうかは二の次にして

・現在をおろそかにせず確かに生きる作者。

唐黍の花　　足利　近藤光子

歌会を休みて気儘な日日の過ぐポジティブなもの削がれたような
野ぼたんを一日花と思いつつ亡夫に供えて何故か落ち着く
晩秋に売り出す予定の唐黍の花盛りとう行かねばならぬ
かかりつけ医院に予約入れましたまだまだ生きたい自分を知りぬ
四日間連続作業に疲れしがベビーコーンはやっぱり旨い
学術会議どう解決を計るのか新聞、テレビの賑わしきこと

・型にはまらない独特の表現に惹かれる。

カレーが匂ふ　　豊中　城　富貴美

マスクして〝泪のしづく〟とふ真珠つけて秋雨の喪の席に並ぶ
この世とも思へぬ朝の濃き霧のなかをほのかに香る木犀
晩秋の日の暮れはやし待たずとも老いは等しく静かに来たる
ゆふぐれの散歩の途中を娘の家に寄ればぽあーんとカレーが匂ふ
心して生きねばと思ふ　一センチ足らずのメダカひたすら泳ぐ

・この作者特有の哀愁が漂っている。

十　月　　西宮　鈴木桂子

机によりてすべなく過ぎてしまひたる時を嘆くは子のみにあらじ
〈文学をやるには金と暇がゐる〉苦学のわれに師は笑ひつつ
一冊の本も持たざるわが家に気付きてわれの貧しきを知る
夭折の父思ふ夕耳近く群鳥のこゑしばらくやまず
秋の陽を金色に返す木犀のあはれ閑かに香をふかくする

・勝者は歴史を作るが真の文学は勝者からは生れないと言う。

自然薯　　東京　坪　裕

真二つに割れたら食べ頃むらさきのあけびは甘し種を吐きつつ
通学路に拾いし栗をポケットに突っ込み国語の授業を受けた
山葡萄は酸っぱいけれど空腹のぼくはなんでも腑に流し込む
学校から帰ればいつも蒸しある三時のおやつはさつまいもなり
落葉舞うころは最も太りいて自然薯深く深く掘りゆく

・枠からはみ出した自在な表現に魅力を感じる。

時　間　　福岡　中村かよ子

時間よたまに逆走してはくれまいか焦る夢しか最近みない
時間だって一方通行はきついだろただただ滅びに向かうのだから
宇宙にはエラーなんぞはないものか例えば私がすっころぶみたいな
宇宙がもしすっころんだらそれがきっと真理だったということになる
勇み立つシルバーマークの軽ワゴン信号全赤尻が揺れてる

・新鮮で奇抜な発想によって歌が生きた。

遊　行　　福岡　森田　徹

許されよわが老いの日の隠し味朝寝に昼寝時に転寝
その日暮らしになって久しい老いの日々せめて心の遊行をせん
当り前の如くに続くわが日常切なきまでに夜を渇けり
死に方に尊厳も何もあるものか生命が途切れた時が臨終
限りなくわれの生気の吸われいん両手突かねば立てぬ身となる

・率直に自分の気持を述べる歌に魅力を感じる。

作品二、三特選

（一月号作品から）　渡辺礼比子　選

〈作品二〉

秋更く　米子　青山侑市

秋更けて陽のうすれゆく裏口に紅を染めたるミズヒキの花
末枯れたる黄の葉付けたる落花生を掘り起こしゆく薄ら日のなか
さてもさても昨日は今日の昔かな何を食ひしかとんと覚えず
餅二つ己れが腹に収まれば心安けく歌詠まんとす
とにかくに酒を含みて月仰ぎ虫の音聞けば歌ふを忘る

・自然詠には枯淡の趣が、自画像には洒脱な味わいがある。

満月なれば　藤沢阿部容子

それなりの一日に疲れし老い二人　外食にせん満月なれば
ポテトサラダを口に入れやり車椅子の母に頭を撫でられている
噛む力飲み込む力の衰えし母にこの夏作るスムージー
帰るねと言えばハーッとため息の母さん今日は分かっているね

・親子の立場が逆転する場面をリアルに描き哀切。

知らぬ間に　柏江口絹代

知らぬ間に捻挫しており知らぬ間にこの世を離れていくやもしれず
塀の上で鳴きいし嘴太本日は警戒されてすることがない
合理的に衛生的に進化して回転ずしが回転しない
金色の鯉が口開けぬーっと言う残り時間は少ないのだよ

・軽妙な詠みぶりながら、時に怖いような生の深淵を覗かせる。

生きてはみたが　横浜庄司健造

足腰が弱いのですねコスモスは倒れしままに花を咲かせて
のほほんと生きた気がするアサガオは花をたたみて散りてゆきたり
したたかに菅政権はスタートし朝明けに聞く山鳩のこえ
惚(ほ)れたなど惚(とぼ)けて来しが身をあずけしどろもどろに惚(ほう)けゆくなり

・上句から下句への飛躍が鮮やか。四首目のしゃれっ気が心憎い。

整列　宇治中井房江

平成二十年四月一日書き初めし畑ノートの一冊尽きぬ
平重盛(しげもり)も驚くならん浄教寺〈寺院ホテル〉となりて人を呼ぶ
ひとまわり小ぶりとなりてなお咲けるフェンスの朝顔もう数えない
杜鵑草はた藤袴、女郎花わが狭庭辺のさびしききわみ
青空に浮くちぎれ雲整列と声を掛くれば整いゆくか

・闊達でありながら濃やかな目も働かせてバランス良く詠む。

今年も無事　愛媛平川良枝

あれ程に求めしマスク積まるるをちらっと眺めて支払い済ます
五年日記の去年の今日を読んでおり今年も無事に金木犀咲く

三本ずつ求めし苗の育つ中キャベツの上を白蝶の飛ぶ
採り過ぎし去年の種をばらばらと蒔けばぞろぞろ出ずる豆の目

・知的な観察眼の働いている一連。一首目はシニカルな味わい。

猪口ふたつ　　常陸太田　藤本佐知子

世辞多き人の言の葉その中のたったひとつが今を励ます
昨夜にわが片し忘れし猪口ふたつ疾っくに酔いから醒めたと並ぶ
干すタオル紙のごとくに乾きおり畳めばシャリと音するような
掃き終えしばかりの庭に柿の葉が競うがに散る楽しげに散る

・日々の暮しの哀感を捉えて詠む。擬人化の効いた二首目がよい。

黄の蝶　　藤沢牧田明子

羅の幌を被れるスタンドのほの暗き灯に夏終はりゆく
老いてゆくわれの時間に黄の蝶の光縫ひつつ紫蘇の実を飛ぶ
甘酸ゆく舌にころがる柘榴の実はをさなく受けし父よりの愛
羽繕ふ鴨の羽うらの真白さにたぢろぐわれの秋のはじまり
台風の過ぎたる庭のしめり気にここに居るよと鈴虫の鳴く

・細部にまで繊細な神経の行き届いたセピア色の世界。

〈作品三〉

強くなれた　　大分竹田美智子

今日一日を大事にしようと思っても体と気持ちがついてこないよ
デイケアで発熱すればベッドにて時計ながめて帰りを待つだけ
身内なく泣くこともなくこの病で私は強くなれたと思う
庭で採れたトウモロコシを食べたから歯は今も全部残っている

・闘病の身の率直な感慨が読者の胸を打つ。

ムーミンパーク　　東京中村陽子

訪いたるは九ヶ月ぶり変わらない娘家族とリビングの空気
コロナ禍のムーミンパークに客まばら距離とるシールを風が撫でゆく
コロナ禍に三日留守して隣人に心配されたり嬉しくあらず
コロナ禍もきっといつかは終わるはず驟雨のあとの白きひかりよ

・コロナに翻弄される日々の微妙な違和感を丁寧に掬った。

温泉　　横浜藤田祐恵

どのくらい蛻の殻のままですか脇のあら草にそっと問いかく
山々を移りてゆける雲の影スカイラウンジのカフェオレ甘し
初孫の運動会に燥ぐ友子供ひとりにジジババ×2
柿の実が今年はたんとなったのと黒いマスクの彼女が配る

・手垢のつかない言い回しと息のぬけた詠みぶりが魅力。

夕月の路　　鎌倉渡邉典子

青天にホーイと呼んで待ちてみる箱根仙石すすき野の黙
追へばなほ逃げて笑ひし孫がいま吾に添ひくるる夕月の路
巻雲の招ぶものならん母の忌にまたひとつ識る老いの心を
暮れてゆく茅原とほくむらさきの富士見ゆそこに明日はあると
あらかじめ決められしごとある朝木犀の香が路地を占拠す

・ゆかしい趣の一連。五首目の硬い言い回しも効果的。

村野次郎への旅（132）

「ザムボア」と次郎（二十四）

千々和　久幸

前号に引き続き「ザムボア」（朱欒）に毎号連載された河野愼吾、村野次郎の歌評を読んでみたい。以下は大正七年（1918年）五月号に掲載された「四月號歌評」から、原文のまま引く。

・月さして雪やみたらし障子には軒の垂永の影ならぶ見ゆ　　吉田　恵弘

○村野。物慣れた歌ひ振りであるそして僧院に籠つて居るやうな静けさはある、危ふ氣のないレベルまで達して居るが茲に於て吾等の望むことは此處に安住せずもう一歩突き進まれることである、更に深刻な更に潑溂な努力が見えてもよいことである。

○河野。静かな作者の生活が覗はれるが、も一歩深く力の籠つたものが欲しい。此頃歌を多く作られない様だが、矢張り毎月作つて送つて下さることを希望する。

村野評の「僧院に籠つて居るやうな静けさ」は、とっさには思いつかない珍しい比喩である。わたしは反射的に白秋の「歎けとていまはた目白僧園の夕の鐘も鳴りいでにけり」を思い出していた。白秋の歌には何となくエキゾチックな雰囲気を感じるが、この次郎評には肉声が聞こえるようでうれしくなった。

わたしが「香蘭」に入会したての頃（昭和32年）、村野先生はさる同人の作品を佳作だと評されたあとで「ここまで来ればあとは破綻を求めることだ」と言われたことがあった。

ここでの「もう一歩突き進まれること」をそんなニュアンスで受け止めた。また河野評の「もう一歩深く」も同じ意見だろう。批評する方もされる方もこの先を言葉にするのは難しい。だから評者としてすぐにも手を入れたくなる（添削したくなる）が、先生はあとはすべて本人に預けられた。

真似の出来ないことだとつくづく思う。

・暮れどよむ春陽かなしも比布羅野を渡る嫁ごの銅羅の音遠し　　池内赤太郎

○村野。奇異な地方色を表はしてゐる、ゴーガンの繪と言つた色合である。此の場合「比布羅野」の固有名詞も可成の効を納めてゐる。歌全体として重々しいことと観察の獨創的なところはよろしい。

○河野。この一首は本月特に注意を引いた歌である。作者は新人らしい人であるが、餘程歌については苦勞を重ねた人の様である。格調もしつかりしてゐるし、内容も可成深いところ迄進んでゐる。遠い支那の大荒原が眼に浮んで來てそこに行はれる風俗も想像される。

・疾風吹く小夜の眞澄にきける故夜番の擇の音もみだれたり　　穂積　芽愁

○村野。「疾風吹く」としたら何うしても「小夜の吹く」と言ふ感じは起らないと思ふが如何疾風過ぎしとでもしたら幾らか近くなりはしまいか。尚三句五句等は物をよく視てゐる。他の歌に對しても總じて作歌の態度のしつかりしてゐるのはよろしい。

○河野。上句はすつかり改作する必要がある。

下句は却々捨てがたいいい處を持つてゐる。

・しぐれつつゆふぐれにけり鴉いく羽沼田の空を飛びてめぐるも　磯山　松男

○村野。或光景は相當に寫してあるが主觀の表はし方少し少なき樣に思はる、三句は氣になるしかし落着いてゐてよい。

○河野。この一首は比較的よい。時雨の光景が可成よく現はれて居る。

・風さやぐ枯のほすすき穂をなめてともずれ寒し原のひろさに　田中　白蝶

○村野。「枯のほすすき」などと氣取つてはいけない。下句はいい。君は時々うまい言葉を發見することがある、熱心だからである。今度も大分抜いてあるがクズが無いのは嬉しい。

○河野。作者は勉強をして呉れる。歌も餘程整つて來たが、歌が少し乾いて居るのは作者も注意せねばならぬ。

・投げ入れし石は沈めど壕の面に殘る波紋は遠く擴ごる　仁志村蘆葉

○村野。投げ込んだ石の波紋が唯擴がつただけでは餘り他愛なさすぎる、情景を描寫したのみならず其處には自分の量見を入れなければ歌の大切な生命個性と言ふものが無くなる、之は下句が見ただけを言ひ放したに過ぎない言葉になつてゐるに原因する。

○河野。全体として餘りわざとらしい氣持がする。一寸面白いやうに見えるが、根底が淺い。もつと單純化を要する。だらだらと言葉を連ねただけでは散文と何等變るところがない。

・雪の夜をひとり更かしてつぎおこす炭火のかほりわきて懐かし　若林　光夫

○村野。下句はよいとしても「つぎおこす」は拙い、上句技巧上に於て燃燒の足らないことは明かである。

○河野。二三句がいけない。此一首はこの欠点の爲めに全体を打壞してゐる。下句は相當によろしいやうであるが、もつと苦心をして貰いたかつた。

・汽車待つと歩廊に立てばひんがしの海の彼方に月のぼり來ぬ　今井　春葩

○村野。まだ覺束無氣なところがある、自然の物象に對して作者の心が引き廻されてゐる傾がある。此の歌もこれだけの情景を生かして行くのは可成の技量を要する。併し一般におとなしく歌つてあるのはよい。

○河野。この一首はまづいい方であらう。何らの奇を弄せずに表現して、隋從して行ける所に此の一首のいのちがある。而し、もつと澁みと深さを加へれば尚よろしいと思ふ。

・昨夜の地震うつつに知りて過しけり今朝は時計の二時でとまれる　小川　宗一

○村野。上句なかなかよろしい、秀句たるを失はぬ、下句稍説明になつてゐる、五句「でとまれる」はいや味である矢張り「で」が惡戯をしてゐる。

○河野。作者が表現せんとする境地は解る。が、技巧上少々いけないところがある。四五句が餘りくだけ過ぎてゐるので上句の緊張した氣持を裏切つて仕舞つた。矢張下句が一番大切なところであるから、一層苦心して引き締めて貰いたかつた。

・フランスの酒つめてこし青き瓶何かいとしく花さして見ぬ　柿谷　伸

○村野。感傷的に落ちてゐる。「何かいとしく」なども少しあま過ぎる、それを言はないで表はすのが技量である、細かい事は本人に逢つた上で説明することにする。

○河野。ほんの輕い氣持しか出ておらぬ。センチメンタルなところはやはりいけない。一寸斯うした氣持ちは唯れも持つてゐるやうであるが、これだけでは淺い。もつと力のあるものを欲する。